

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 96 Mar.

特集

相棒

堀野さんちの馬の話

とっておきのパン

富士を撮る人

コラム わたしの相棒



FIELD・NOTE

no.96 Mar.

contents

特集 / 相棒

十日市場に建てられた
ぼんでんさお
梵天竿。冬空の下、風に吹
かれて踊っているかのよう
(2018年1月14日)

06 堀野さんちの馬の話

09 とっておきのパン

12 富士を撮る人

14 コラム わたしの相棒

16 五つの山を巡る

19 都留をいとおしいと
思えるゲストハウスに

22 てくてく都留さんぽ
No.4 歴史を楽しむ散歩道

24 リスを追いかけて

26 氷の花

28 目の前に広がる、
もう見られない景色

30 連載第2回
木に学ぶ春夏秋冬

32 どんど焼きは14日
の晩に

34 フィールド暦

36 連載こてんさんぽ
第3回 梅

38 金山の神楽(後編)

41 都留の風景写真集
～余寒の候～

42 前編
おばあさんの思い出
～学生時代～

45 FIELD・NOTE NEWS



アジサイの冬芽。
よく見ると、顔に
見えてきませんか？(撮影:長尾
泉 2018年2月22
日@都留市古川渡)



あなたにとっての「相棒」は？

相棒



『お気に入りのブックカバー』



『毎日使うペン』



『軽井沢で買った器』



『コーヒーの焙煎機』

あなたには、「相棒」がいますか？

「相棒」とは仕事などをする仲間のことを言います。

江戸時代に駕籠かごと一緒に担ぐ相手をそう呼んだことが由来です。

もともと人を意味する言葉ですが、愛着を持っている「相棒」は人以外でもきつと見つけられるはず。



『7年前に買ったカメラ』



『歩き疲れないべったんこ靴』



『なんでも作れちゃうミシン』



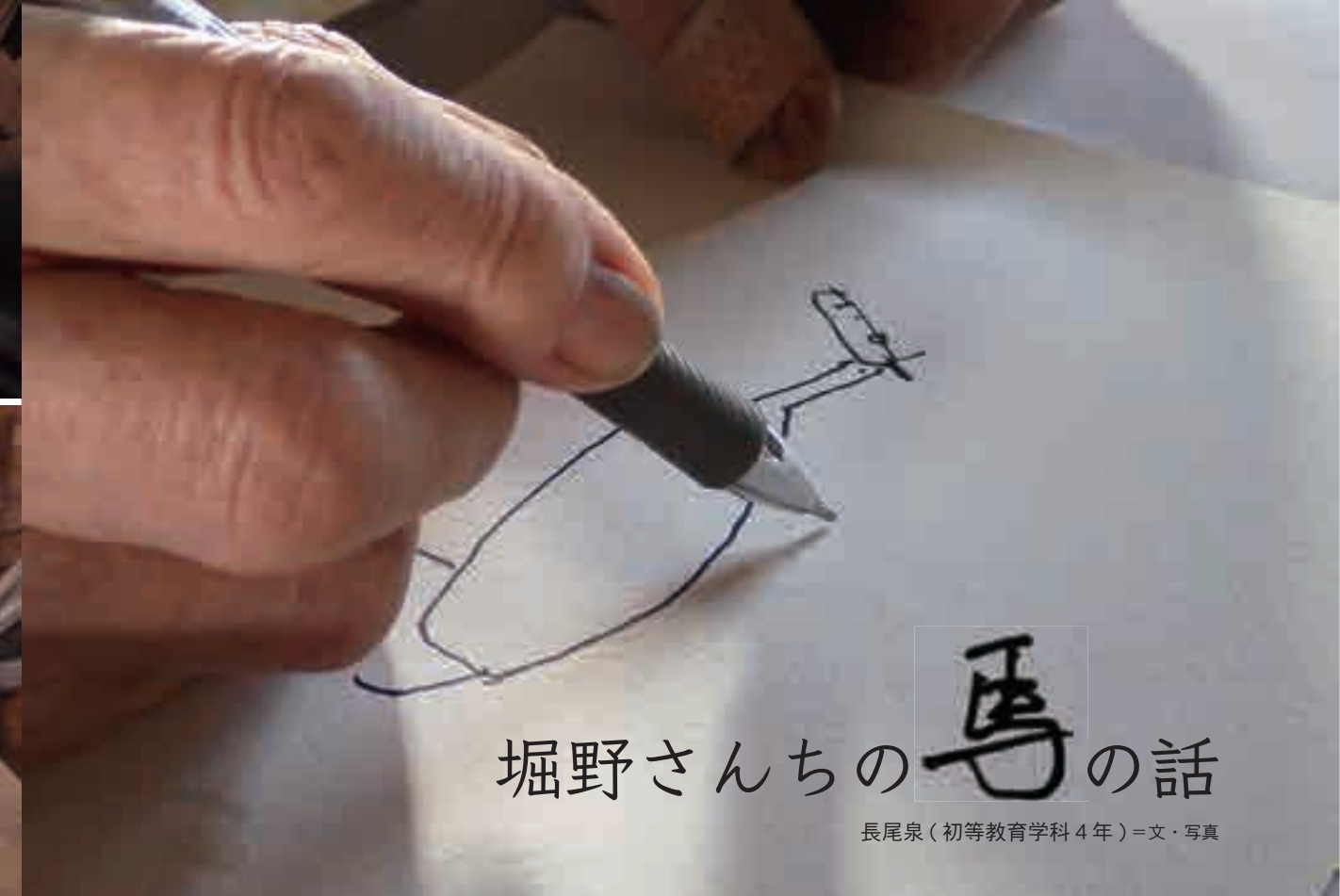
『ニワトリのペンケース』



『マンドリン』

何度も読み返してしまふ1冊の本、
 予定がぎっしり書いてある
 スケジュール帳、
 開店当初から使っているフライパン、
 毎日愛情をかけて手入れしている
 庭の植物たち。

「相棒」という言葉をきっかけに、
 人とのとの関係を探ってみました。



堀野さんちの馬の話

長尾泉（初等教育学科4年）＝文・写真

「首があるよなあ……」といいながら馬の絵を描いてくれた。タイトルの「馬」は義春さんの字

1月21日、農作業小屋には机とイスが用意されていた。差し出された紙には、堀野義春さん（88）^{はりのよしはる}が生まれてからのことが、年表のように書き出されている。その紙には、そこに馬の文字が見つかる。義春さんの隣には長いあいだ、馬がいたみたいだ。

馬小屋のなかへ

お話を始める前に馬小屋のなかを見せてくれた。当時使っていた馬小屋の広さは、約5メートル四方、高さは2メートルちよつとくらい。馬がこのなかで、ぐるつとUターンできるほどの広さだ。思っていたよりも広く感じた。天井にはオレンジ色の裸電球が一つ、ぼつと部屋のなかを照らす。入って正面の壁には、馬につける道具が並べてかけられていた。義春さんは、その一つひとつに手をかけ、これはなにで、と教えてくれる。「はみ」「はも」「しりうち」「のりくら」。

見たこともない道具、聞いたことのない名前。それでも教えてもらったあとには、馬がこの道具を身につけている姿を想像していた。

馬との暮らし

義春さんが生まれたのは昭和5年の元日のこと。そのころにはすでに馬がいた。当時の小形山^{おがたやま}では50頭ほどの馬が飼われていたという。当時小学校の次にかよう、高等小学校を卒業したところから義春さんの年表に馬が多く出てくるようになる。

義春さんは、馬が食べる草を刈りに同級生7人ほどで高川山^{たかがわやま}へいったときの話をしてくれた。その日は義春さんがみんなを起こす当番の日。お母さんに「朝早く起こしてくりよう」とお願いしてから寝た。ところが、あまりにも月明かりがまぶしくて、お母さんが早く起こしすぎてしまった。そんなわけで月明かりのなか草刈りにいった、なんてことがあったそうだ。草は束にして馬の背



4



1



2



5



6



1. 馬の口に噛ませる「はみ」。手に持つと、鉄が錆びてざらついていた
2. 「のりくら」を見せてくださる義春さん。色が薄いほうは農耕用、手にしているほうは荷物を運ぶときのものだろう
3. 馬を飼っていた家には馬の像が置かれていることがある。義春さんの家でも、帰ってくる主人を玄関でお出迎えしていた
4. キャタピラーの隣に立つ義春さん。「今はこいつが馬の代わりだ」
5. 荷物を引かせるときに馬の首にかける「はも」
6. きれいに整頓された馬具



1. 当時馬と丸太を運んだという道を歩いた
2. 舟場橋の下で馬に水浴びをさせていたという
3. 馬頭観音には最後の馬を看取った日が記されている

中に左右三つずつくりつける。これ全部で一日分の馬のご飯だ。

古川渡にある川茂発電所を建設するさい、馬に切り出した石を運ばせたこともあった。

発電所近くの細い道を通っていたときのことだ。雨のあとで道がぬかるんでいて滑つてしま

まい、カーブを曲がりきれずに荷物が道の脇へガクツと落ちてしまった。それに引つ張ら

れるように馬も道の下に転がってしまった。落ちてしまつて動けない馬は、義春さんのこ

とをじつと見つめていたそうさ。どうしたらいいか指示を待っていたのかもしれない。義

春さんはすぐに馬と荷物をつなぐ「はも」を手刀で切つて馬が動けるようにしてやつたとい

う。馬に怪我はなかったそうさ。ドキドキしながら聞いていた私はやつと胸をなでおろした。

「馬のやろう」

馬の寿命はだいたい15年くらい。義春さんの家では3回くらい馬を変えているそうさ。最期を看取つたのは一番最後に飼つた1頭だけ。最後に飼つた馬はおとなしい性格で仕事も器用にこなしたそうさ。馬にも性格つてあ

るんですね、とつぶやくと、「そりゃあ、あるさ」と返ってきた。義春さんが馬を飼うのをやめたのは、昭和49年にその馬を看取つたときのことだ。「もう終わりにしよう」と思つて、馬小屋を出た脇に馬頭観音を立てた。

義春さんは馬のことを「馬のやろう」と呼ぶ。「馬のやろう、あのときな……びつくりしたんだろなあ」というように。名前もないのか、と驚いてしまった。でも義春さんの口調はなんだか会社の同僚とか仕事仲間の話をしていくときのようなさ。今だつたら重機がやることを、馬がやっていた。馬がいなかったら仕事にならない。つまりは生きていけな

* * *

お話が終わつてから、当時丸太を運び出していた古宿集落の山道に連れていつてくれた。今はアスファルトで舗装されているが、当時は砂利道。この坂を丸太を引つ張り歩いていたのか、とあらためて馬の力強さを感じた。一緒に歩きながら義春さんは「久しぶりに思い出したなあ」とつぶやいていた。



とっておきのパン



パカッと開いた元気な割れ目のパン。噛めば噛むほど小麦粉の甘みが広がり、かたい皮まで味わいたくなる。クルミとオレンジピールがぎっしり入っているけど、どれか一つの素材が目立ちすぎているわけではない。私の大好きなこのパンは、いったいどんな人が作っているのだろう。

山内利奈(社会学科3年)=文・写真





左：工房のなかに入ると作業台やオープンなどの機械が見え、入り口付近には7種類ほどのパンが並んでいる
右：工房は店主の自宅の隣にある(2018年2月4日)



富士急行線東桂駅から歩いて約5分のところに「パン工房 稔^{みのり}」はある。一見ふつうのプレハブ小屋のようだが、「自家製酵母パン」という文字と「open」という看板でここがお店だとわかる。入り口の扉を開けるとすぐに口元が笑みで緩んでしまう。なにしろ美味しそうな香りが工房中に漂っているのだから。胸いっぱいはその香りを吸い込み、店主の鈴木稔^{としひろ}さん(42)にあいさつした。

できたてのパンが美味しくて

「パン工房 稔」では朝9時半からパンを販売している。この工房以外にも「道の駅つる」や上野原市で委託販売をし、地方へパンの発送もしている。工房で売るだけでなく、遠くに持つていくパンを作らなければならぬ。そのため鈴木さんは夜8時に寝て深夜1時半ごろに起き、作業をするそうだ。

鈴木さんはパン屋になる前、甲府市で建築関係のお仕事をしていた。建築現場の朝礼が終わると、現場の職人さんが近所のパン屋でパンを買ってきてくれたという。「鈴木君食べなよって。それができたてで美味しくて。単純なきつかけですね」。しばらくして会社

を辞めてパンの専門学校に通い始めた。このとき鈴木さんは29歳。パンを作り始めたころ、「こんなに小っちゃいパンがこんなに膨らむんだ。すごい」と感動したそう。学校に通っているときから、すでに自分のお店を持ちたいという夢があつたという。

パンの専門学校を卒業してからは千葉県チェーン店で働くようになった。そこでは1年も働いていないそうだ。鈴木さんはそのお店で、体にあまり良くない添加物や保存料などを多く入れることに違和感を覚えたらしい。また、「バターとかショートニングみたいな無味無臭の油を使うと、メモを取っているノートがべたべたになつて。こんなのも嫌だなあつて」と鈴木さんは苦笑いしながらおっしゃる。大切なノートが汚れてしまつては、後で見返すこともおつくうになつてしまひそうだ。「惣菜パンやクリームパンは中身が美味しいだけに思っちゃうっていうか。いろいろ入れるとまずくはないんだけど……。やつぱ粉の風味とか、素材の味を楽しみたい。そういうのがしつかりわかるパンが自分にとっては一番良いなつて。それで方向性が変わりましたね」。

小麦粉の風味を生かすために

「パン工房 稔」で作られるパンの材料は、小麦粉と砂糖、塩、水、それからレーズンで作った酵母だけ。パンの材料を最低限に絞ることで、クルミなど新たな材料を入れてもそれぞれの素材の味がしっかりわかるようになるのだ。そして材料の一つひとつにもこだわる。食パンにはカナダ産の高級な小麦粉、ほかのパンには国産の小麦粉と、パンの種類によって使い分けているそうだ。

パンは酵母が発酵するときに出す炭酸ガスを利用して膨らむ。その酵母の一種に天然酵母がある。これはブドウなどの果実や穀物に付いている野生の酵母菌を利用したもの。それぞれの酵母が出すアルコールと、果実や穀物がパンに独自の味と香りを付けている。鈴木さんは小麦粉の風味を生かすために、自家製の酵母を作ることこだわっている。自家製酵母は、自分のお店や家庭で一から作る酵母だ。鈴木さんは「パンって生きものなんですよ」と言い、レーズンから酵母を作っているようすを見せてくれた。炭酸飲料のような細かい泡



がシユワシユワと出ている。レーズンと甘いお酒のような香りがほんのりして、この時点で食欲をそそられてしまう。

こうして毎日パンを焼く鈴木さんのそばには、ベテランの相棒がいる。それが店の奥にあるオーブんだ。以前修行していたお店のかたに譲ってもらったという。そのかたが20年ほど使い、さらに鈴木さんが9年ほど使っている。

真っ直ぐな目

鈴木さんはこだわりの強い。子どものころからコツコツと何かをすることは好きでした

かと尋ねると、「ああ、好きでしたね」とすぐに返事があつた。「昔クッキー作りましたもん。最初から。小学生のときかなあ。粉とか砂糖とか水を混ぜてただ焼くだけ。食えやしない」。私はコツコツと何かに取り組むことが苦手だ。だから鈴木さんのお話を聞いて、挫折をしたことは無いのかとても気になった。「無いですね。やっぱり目標があつたからね。つらさよりも楽しさが勝つ」と真っ直ぐな目でおっしゃった。この返答のときに限らず、鈴木さんはいつもこちらの目をじつと見ながらお話される。

お話が終わってから、鈴木さんが試作中のパンを食べさせてくれた。それはお客さんのリクエストに答えて作ったもの。「今はお客さんの声に答えて、喜んでもらえることが楽しい」。この言葉を聞いて、鈴木さんは自分の楽しみをその都度ちゃんと見つけているのだなと思った。そうしてパンやお客さんに向き合っていることを知ると、鈴木さんと鈴木さんのパンに出会えて良かった、心から思う。

富士を撮る人

都留市川茂の「よこぶきばし」から富士山を撮る廣嶋さん。この場所は都留市でいちばん富士山がよく見える場所だという（2018年1月30日）



「天空紅珊瑚」
懐中電灯に赤いフィルターをつけて、手前のシロヤシオの木を照らした



「昇月アーベントロート」
アーベントロートとは、夕焼けが山に反射して赤く見える現象のこと

紅いサンゴのような木の奥に悠然と構えた富士山。不安になるくらい大きな月を背に、近くまでよった富士山。廣嶋勝寛さん（75）の撮る富士山は、私が今まで見たことのないものばかり。撮りたいとき、撮りたいように富士山を撮る廣嶋さんのそばには、いつも相棒がいた。

ずっと見ていた存在

廣嶋さんは15年前、退職を機に興味として写真を撮り始めた。退職前に勤めていた建設会社が富士吉田市にあるため、出勤中や勤務中、毎日のように富士山を目にしていたという。「だって仕事でなんかに撮らな

くても撮れないでしょ。それでずっと、いつかちゃんと富士山を撮りたいと思っていたんですよ」と廣嶋さん。富士山ばかりを撮る理由はそれだけではない。「なんでもかんでも撮ろうと思ったら極められない。365日撮りに行ったら足りないよ」。廣嶋さんは写真の技術を極めるために、被写体を富士山に絞った。退職してすぐ、都留市の商工会が運営している「デジカメラクラブつる」に入会した。カメラの使いかたを教わるところから始めたそう。クラブではほとんど初歩的なことだけを教わり、毎日撮りに行くことで少しずつ

つ経験を積んでいた。

撮影場所にはいつも廣嶋さんと同じように富士山を撮りに来る人たちがいて、その人たちからさまざまな情報をもらおうそう。花火と富士山と一緒に撮るためにはいつ、どこに行けばよいのか。月や太陽の位置を計算するにはどんなパソコンのソフトがよいのか。富士山を通して親しくなった仲間たちの存在も、廣嶋さんの写真の技術の糧になっている。

撮りたいように撮る

廣嶋さんはプロの写真家から、撮影時の情報を欲しいと頼まれたこともある。花火と富士山と一緒に写すにはどの場所から撮ればよいか。いい位置に月が見えた日の、月の動きはどうだったか。毎日富士山を撮りに行くことでしか得られない情報は貴重だ。「写真家っていうのはおもしろいもんでね、それを職業にするのに資格もなんも必要ないんで



「厳冬 冬花火」

無風であること、月明かりがあること。たくさんの条件が重なってやっと撮れた1枚

相棒とともに

「これがなきゃ楽しくないね。これは人生だから」。廣嶋さんはカメラにぼん、と手を置きながら言った。人生とも言えるほど、写真を撮ることは廣嶋さんの一部になっている。廣嶋さんの人生は、カメラなしでは語れない。

現在は自身の体力と相談しながら撮りに行く。そのため撮影の頻度こそ減ったけれど、写真に対する気持ちは変わらない。毎日パソコンで月や太陽の位置を計算しながら、撮りたい富士山に出会える日を狙っている。

富士山を撮り始めて15年が経った今でも、廣嶋さんの心のファインダーはつねに富士山を捉えているのだ。

すよ。カメラを持った瞬間から誰でも写真家になれる。どれだけ撮りに行っただけというのが大事なんですよ」。毎日のように富士山を撮りに出かけていた廣嶋さんが言うその言葉には説得力がある。

廣嶋さんは今までに何度も写真のコンテストで賞を獲ったことがあるが、最近はどうも応募しなくなった

のだそう。賞にはあまりこだわりがなく、あくまで自分が撮りたい富士山を撮る。「自分の楽しみのためにやっているから。撮りたいように撮りますよ」。

廣嶋さんは写真のことを話し出すと、止まらない。目が輝いて手振りも大きくなる。その姿を見ると、本当に写真を撮ることが楽しいのだとわかる。

高橋光（比較文化学科2年）＝文・写真

何年も使っているものには、持ち主の思い出があるはず。
地域のかたに「あなたの相棒は何ですか？」と尋ねてみました。

佐藤琢磨（社会学科2年）＝文・写真



2018年2月8日

カフェナチュラルリズム

富士急行線都留市駅から都留市立病院方面へ400メートルほど。中央高速道路の側道脇。

平日 20:00～25:00 / 土日 15:00～17:00、20:00～25:00
（『フィールド・ノート』83号、90号に掲載）

ヒーコさんの「すり鉢・すり棒」

「カフェナチュラルリズム」のマスター、ヒーコさんこと若林英行さんの相棒は、すり鉢とすり棒である。
このカフェはスパイスを使ったチャイが美味しい。
「スパイスミル（スパイス挽き）があるのに、これを使っちゃう」とヒーコさんは話してくれた。
かれこれ8、9年は使っている。
ヒーコさんがスパイスを砕くときには流れるようにすり鉢へ手が伸びる。

「魚屋さん」の「包丁」

静岡県あだみ熱海で魚を仕入れ、都留市で移動販売をしている勝俣民男かつまたみおさんの相棒は「包丁」だ。

「相棒っていうと難しいけどねえ……。でも仕事だったら包丁だし、仕事がない日ならチェーンソー、猟をするなら鉄砲が相棒だね」と勝俣さんはおっしゃる。よく使うのは右から2番目の包丁だ。

もう10年ほど使っているが、魚も豆腐のようにすつと切れる。

よく研がれているのだろう。

勝俣さんが包丁を大切に使っている証だ。



2018年2月15日

魚屋さん（移動販売）

水曜を除く平日。谷村町駅、都留市立病院近辺、十日市場、古渡、四日市場、大幡などを夕方の時間帯に走っている。
谷村町駅（火・金）16:00～17:00、十日市場（火・金）19:30～20:00（『フィールド・ノート』92号に掲載）

特集

相棒

堀野さんの相棒は馬、
鈴木さんの相棒はオーブン、
廣嶋さんの相棒はカメラ。
どれもその人の日常には
欠かせないものでした。

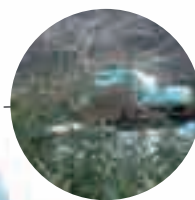
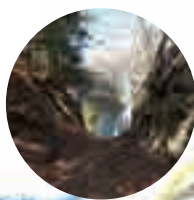


仕事や趣味などを
夢中になって続けてきたこと。
大切にしてきたこと。
それを教えてくれるものが
相棒なのだと思います。

そんな相棒がいることは、
誇らしいことではないでしょうか。

南條新（初等教育学科4年）Ⅱ文・写真

一月12日の10時ちようど、都留市つるの登り口から歩き始めた。「ひまわり幼稚園」の南側にある、舗装された坂をジグザグと登っていく。登山道の左手には谷村発電所の水道管が山の上まで続いている(②)。人がなかに入れそうなくらい大きい。20分ほどして最初の斜面が終わる。振り返って大月市のほうへ続くまちを眺めていたら、後ろから機械の音がし始めた。発電所が動き出したのだ。音



※1 都留アルプス

都留市つるから都留市古渡^{こわた}までの、全長8キロメートルほどの登山道の呼び名。平成28年ごろから市や市内の登山愛好会などにより整備された



目の前には山とまち

の先には水槽があつて、貯まった水がうねっている。この装置が動いているのを見るのは初めてで、足を止めてつい見入ってしまった。谷村発電所を後にして最初の山を目指す。舗装された道が終わり、いよいよ山という感じだ。木に囲まれた道を登っていくと尾根に出た。振り返るとまちが見下ろせる。雲の上を歩いている気分だ。発電所から30分ほど起伏が激しい道が続く。息が上がってきたころ、山の頂上に電波塔が見えた。

登り始めて1時間ほどで烽火台^{ほうかだい}跡に着いた。昔は狼煙^{のろし}を上げる場所だったけれど、今は電波塔が立っている。360度景色が見渡せて、富士山の頂上も見える。先へ進むときに看板を見て、ここが蟻山^{ありやま}だったと気づいた。

烽火台跡を出ると、傾斜が急な坂がある。それを過ぎれば、登山道はこれまでより緩やかになる。それから20分ほどで、登山道に「白木山^{しろきやま}」と書かれた看板があつた。道の脇には木や笹が多く、見晴らしは良くない。そこから10分ほど坂を登ると長安寺山^{ちやうあんじ}に着く。ここもまわりに植物が多い。この山まで来る

のに、急な坂をいくつか登った。長安寺山のすぐ先にはパノラマ展望台があつた(③)。

パノラマ展望台に着いて、斜面から落ちないギリギリのところまで進む。そこからは南の方角が見渡せた。左手にはこれから進む山が連なっていて、右手にも山がある。そのあいだに都留市のまちが広がっていた。ふだんは大きく見える建物が、ここからだとおもちゃのように小さく見える。それだけ高いところまで歩いてきたのだと実感する。まちは晴天のおかげか水色がかつて見えた。感動しつつ、高いところにいる怖さも感じる。再び左手に見える山へ目を移し、先へと進んだ。

15分くらい歩くと右手にそれる道がある。その先に「ピーヤ」と呼ばれる水道橋がある(④)。このピーヤはアーチの部分がトンネルと同じくらい大きい。ピーヤを後にして15分、登山道の脇に「天神山^{てんじんざん}」の看板を発見。周りが笹^{やぶ}で景色は見られない。そこから下ると元坂^{もとさか}の分岐に着き、10分ほどで東屋^{あずまや}に着いた(⑤)。

古城山^{こじやうざん}を目指して

東屋を出て緩やかな上り坂を歩く。10分ほど歩いたあたりで左手の木々の先に重機が見



左：蟻山の頂上に見える電波塔(2018年2月11日)
中央：住吉神社の鳥居(2018年1月12日)
右：白木山の頂上。木々の隙間から都留市役所が見えた(2018年1月12日)

③パノラマ展望台から見た都留市のまち並み。この日は天気が良く富士山が見えた(2018年1月12日)

えた。工事をしているところだった。そしてすぐに楽山公園との分岐に着く(⑥)。そこからアップダウンを挟みながら40分近く登っていく。道中、アカマツの多い道でコウヤボウキを見つけた。ここまでに何度もコウヤボウキは見えてきたけど、ピンク色のものは初めてだ。甘くておいしそうな綿毛に癒やされる。坂を登り切ると今度は下りが多くなる。足早に先へ進んで20分ほどすると、やまびこ競技場との分岐に着いた。そこからは薄暗い林を涸れ沢(※2)に沿って進む。静かな森を黙々と歩いて、八ツ沢に到着(⑦)。このあたりの山では数少ない水場である。

ここから先はまだ訪れたことのない道だ。先ほどの分岐から暗い道が続く。少し肌寒くなってくる。20分ほどで斜面を登り切ると、陽の光が差し込んだ。そこからはアカマツが多い道をしばらく下る。20分ほどで坂が終わり坂を越えて、古城山に着いた。道の途中に頂上があるため、見晴らしは良くない。けれどここまで来られた達成感が大きい。登山道は住吉神社の境内につながっている。ここまですぐに無事に来られたことを感謝して、本殿に頭

を下げた。境内を出ると5分ほどで古渡の民家が見えてくる。坂を駆け足で下り、民家の畑に出た。登山道はここまでの。都留アルプスを歩き切るのに、休憩を入れて5時間半かった。



都留アルプスの一つの山ではない。端から端まで歩くのに、五つの山を続けて登ることになる。その道のりにはさまざまな楽しみが詰まっている。巨大な建造物がある場所。都留市のまちを一望できる場所。森の静けさを感じる場所。都留アルプスを歩けば、これらの楽しみを一度の登山で味わえるのだ。



コウヤボウキを見つけては一休み。綿毛が黄土色のものもあった(2018年1月12日)

※2 涸れ沢：ふだん水は流れていないが、雨の後などに流れができる沢



都留を いとおしいと思える ゲストハウスに

「ゲストハウスゆかり」は本学の学生が中心となって立ち上げ、2017年11月1日にオープンした。富士急行線谷村町駅を出てすぐの、城南公園の隣にある。そこでは宿泊だけでなく、地域の人が交流できるスペースの貸し出しもおこなっている。なぜ都留市に「ゲストハウスゆかり」はできたのだろうか。2018年1月13日にメンバーの一人、いしかわ ひめか石川姫歌さん(22)にお話をうかがった。

窪田りさ(社会学科3年)＝文・写真

姫歌さんたちは空き家を改装しゲストハウスにした。あえて空き家を活用したのは、山梨県の空き家が多いという問題をどうにかしたかったからだ。「ちよつと示してみたかった」と姫歌さんは言う。「私たちがやれるのだから、ほかの学生でもできるよって言いたいし、もちろん学生がやってくれるんだから社会人だってできるし、やろうと思えばどんなことだってできるんだよってのを示したかった」。

「ゆかり」という言葉は「縁」と「紫」両方の漢字をあてることができ。『古今和歌集』の和歌の一つ「紫のひともとゆゑに 武蔵野の 草はみながら あはれとぞ見る」が名前の由来になっている。この和歌は紫草が1本あることで、その草が全部いとおしく思えるという意味だ。

「ゆかりがあることで、このまちをいとおしく思えるきっかけになれるといいなあ。例えばゆかりがあることで、ちよつと誇れたりとか、こ

ういう場所ができたんだよって地域の人（ほかの人を）連れてこられたりとか」と姫歌さんは言う。

欠かせない2時間

姫歌さんは友人との思い出を語るように、お客さんのことを話してくれた。「すごい軽装備できて、荷物それだけですか？ っって聞いたら、『走ってきたんで、荷物こんだけしかないっすね。日本橋から100キロ走ってきたんすよ』 って」。

地域のかたがわざわざ東京都の友人を連れてきてくださったこともある。「自慢げに『こういう場所ができたんだよ』 っってゆかりのこと紹介してくれて、『都留はこれから面白くなってくぞお』 っって地域の人が自分のまちのことを生きいきしゃべって、嬉しいなって思った」。

そんなお客さんたちに喜んでもらうための一環として、毎日2時間の清掃は欠かせないという。客室の畳を掃き、掃除機をかけ、ぞうきん

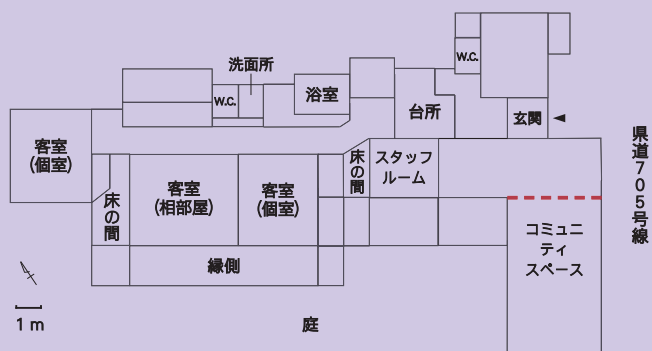
がけをする。四隅や棧、電気の傘の上など、ほこりのたまりやすい場所をきれいにすることも心がける。とくにリーダーの庭山恵梨さん（22）は、お客さんがきたときに感動してほしいと強く思っているそう。私も客室を見せていただくと、「きれい」という言葉が自然に出た。自分が部屋に入っって少しでもほこりを落としたらどうしようと思うくらい、塵一つなく整っていたのだ。

言葉からあふれる

姫歌さんは次から次へと、自分の気持ちを素直に言葉にできる。「『ゲストハウスゆかり』を」やりたいて思っって自分たちなりに行動を起こしたんだけど、結局それにリアクションしてくれる人がいなかったらここはできてないから。ほんとにいろんな人が、すごく協力してくれて。すごくあったかくて。（ゲストハウスにする家を探しているときに）『こういうことやってんの。こ

見取り図

赤の点線で描かれた部分の壁を壊して広くし、地域の人交流できるコミュニティスペースを作った



そのほかの「ゲストハウスゆかり」メンバー

越智寛史さん (22)、赤尾晴香さん (21)、青木卓也さん (21)、石井萌美さん (21)



上／ゲストハウスのこたつに入る姫歌さん(右)とメンバーの一人加納勇希さん(手前)と足田秀哉さん(奥)。足田さんは初めてきたにもかかわらず、ここに馴染んでいる 右下／窓から心地よい日が差し込む客室 左下／「ゲストハウスゆかり」がテレビに出たとき、上野原市のおじいさんがゆずってくれたお皿の一部

(2018年1月13日)



ういうおうちどう?』みたいな。ふつうこんなことしてくれる? つて思うぐらい、たぶん自分たちだけじゃ絶対できなかった。新しいつながりがどんどん広がっていくことで、できなさそうだったことが形になるっていうのは、楽しかった、ありがたかったことかな」。

お金だけじゃない

改装費には約200万円かかったそう。そのうち60万円を「ゲストハウスゆかり」のメンバーが負担し、100万円を空き家の持ち主であるNPOのかたから借りている。そして残りの40万円はクラウドファンディング(※1)で集めた。

「友だちにお金出してって言うのすごい嫌だったけど、なんかそれで関係性が壊れたりとかするのはすごい嫌だったから。言うか言わないかとかは、けっこう悩んだけど、けっこうよく、私は自分が今LINE(※2)に登録してる友だち全員に、一

人ずつメッセージを送って。それで応えてくれた人もすごく多かったし、お金は出せないけど、応援する気持ちはあるから、完成したら泊まりに行くねとか言ってくれる人もいたし」。姫歌さんたちが集めたのはお金だけではない。まわりの人が応援する想いも受け取っていた。

私は都留市を好きだと思っていて、口にするのは少し恥ずかしい。都留市を知らない人によさを分かってもらえるか不安だからだ。でも姫歌さんは違う。都留市が好きという想いを素直に伝えることができる。その想いはゲストハウスという形になった。都留市をいとおしいと思う気持ちは、このゲストハウスから広がっていく。

(※1) インターネット上で多数の投資家から少しずつ資金を集める仕組み。さまざまな形があり、「ゲストハウスゆかり」は見返りのない寄付の形を用いた(※2) インターネットを介して連絡を取り合うツール

【参考文献】

なにか新しい小道でも、のんびり歩かせ
てきな景色をみつけたりします。
あなただけの散歩を
てくてくお散歩して楽しんでね。



No.4 歴史を楽しむ散歩道

今日は田野倉駅から
尾島郷工資料館まで
ぐるりと散歩しました



町を囲んでいるコンクリートが
この部分で崩壊しており
地層がみえています

大輪橋

町内歴史小山田氏所
古墳等。穴地蔵のありま

富永寺

舟橋橋

このポイントから、舟橋八景の1つと
いわれる、橋の上を石の作り出す景色
を楽しむことができます

バスと
おのれいし
花壇が
あります

田野倉

元禄七年
(1694年)の
屋敷跡!!

屋敷跡や田圃跡
供養塔など六重の
石造物が並んでいます

田野倉駅入口

田野倉駅の
出発!!



尾島郷工資料館



リスを追いかけて



1



2



3

1. 枝の上でじっとして置いて物のように動かないリスを見つけた。これがリスとの最初の出会いだ(2017年12月15日) 2. 写真の左側が雪の上に残っていたリスの足跡。右側が私の足跡だ(2018年2月9日) 3. うら山を登ったところにある大桑小屋(標高約600メートル)。写真の左上に見えるのがムササビの巣箱で、大桑小屋からの距離は約8メートル(2018年2月20日)

本学のうら山を歩いてみると見つかる、半分に割れたクルミの食痕。落とし主はリスだ。食痕を見るだけでは物足りなくなり、リスに出会うために全部で5日観察した。

本学のうら山を約15分登ったところにある大桑小屋という観察小屋。ここでリスを見ることが出来る。観察をする時間はだいたい朝の9時から10時までの1時間。落ち葉に霜が降りるほど冷えた山のなか、すがたが見られるまでじっと待つ。

待っているあいだ、リス以外の動物を見ることが出来る。観察初日の2017年12月15日、最初に見られたのはアカネズミの子どもだった。アカネズミを見るのはこれが初めてだ。木の実を探してカサカサと動き回る。置いてあるクルミを見つけると、その場では食わずに、近くにあったトンネルに持ち帰ってから食べていた。自分が落ち着ける場所で、ゆつくりと食べるつもりなのだろう。

初めてリスを見ることができたのも、観察初日だった。たくさん時間をかけてやっと見られるのだと思っていたので、少し拍子抜けしてしまった。見上げるくらいの位置にある枝の上で丸くなって動かない。しばらく写真



リスの食痕



4



5



6

4. 巣箱から体を乗り出しているムササビ。
この直前にリスが巣箱へやってきた(2018
年1月12日) 5. ヤマガラという鳥。5日間
観察したうち、4日見ることができた(2017
年12月22日) 6. アカネズミの子どもがやっ
てきた。手をのばせば触れるくらい近くで
撮影していても、気にならないのかずっと
ヒマワリの種を食べていた(2017年12月
15日)

を撮ったりながめたりしていたけれど、最後
まで同じ姿勢のままだった。

ふたたびリスが見られたのは、4回目に観
察をした1月12日だ。観察を終えてそろそろ
帰ろうかと思ったとき、近くの巣箱から何か
が飛び出した。思わず「あれ何？」と叫んで
しまう。飛び出てきたのはリスだった。そ
のあと続けてによりりと顔をのぞかせたのは
ムササビだ。リスは飛び出してすぐに木の上
へと登っていき、見えなくなってしまった。
いなくなったあとも、ムササビは巣箱から顔
を出しキョロキョロとあたりを見渡してい
る。リスのことを警戒しているのだろうか。
リスと比べてムササビはとても大きく見え
た。

食痕をきつかけにしてリスを追いかけた
ら、ほかの動物にも出会えた。図鑑で見たこ
とはあつても、じつさいに観察していると発
見がある。すばやく動き回っていたり、想像
していたよりも大きかったり。その場に行か
なければ気づけなかったことだ。そうやって
自分の目で見たことは、本で読んだことより
も強く印象に残っている。新たな発見を楽し
みに、私はこれからも山にかよう。

関唯伽(社会学科1年) 文・写真

氷の花

まんなかは空洞になっている。一瞬見ただけでは氷の結晶とはわからない(2018年1月26日)



左/10月ごろのシモバシラ。小さな花がたくさんならんでいる(2016年10月7日) 右/ 本学自然科学棟横の花壇。塀の向こう側にあるのが大変だった(2018年1月26日)



シモバシラという植物を教えてください、図鑑で探す。冬になるとシモバシラは茎に氷の結晶をつけると知った。そんな不思議な現象を自分の目で見たい。そう思い本学周辺でシモバシラを探すことにした。

シモバシラとは地面にできる霜柱からついた名前だ。たくさんの小さな花が一つの方向をむいてならんで咲く。その花は9月から10月にかけて咲き、それ以降はもう枯れてしまう。冬になると地中のまだ生きている根が水を吸う。その水が茎からしみ出ると、外気に当たり氷の柱ができる。本学の自然科学棟の横にシモバシラがあるという話を聞き、シモバシラにできる氷の柱を1月14日から探しはじめた。都留市は寒いから、案外早く見つかるだろうと期待していた。けれど観察に出かけた、1月14日、18日、22日、雪の積もった24日は見つけれなかった。

じっくり見ると

雪がなかなか溶けないから見つけることは難しいかな……と半ばあきらめていた。しかし1月26日について見つけた。自然科学棟の横にある花壇の奥にひっそりと隠れるようにそれはあった。高さは4センチ、横幅は3センチで想像していたよりも小さい。ふわふわした綿菓子のような見た目をイメージしていたが、近くで見ると繊細で、さわつたらすぐ壊れてしまいそうな結晶だった。茎のまわり



左 / 横幅が大きい結晶。存在感があって目立ちそう (2014年 12月 18日) 右 / 縦に細長く巻きつく結晶 (2014年 12月 18日)
(写真提供=北垣憲仁)

に結晶が渦状にあつて、同じ呼び名でも地面にまっすぐ伸びる霜柱とは姿がまったく違う。地面にある霜柱は踏んでシャキシャキ鳴る音を楽しめるが、シモバシラは安易にさわれない高級なシルクのような。見つけたのは午前11時ごろで日当たりも良い時間だったが、そんな時間まで溶けないで残っていた。

わずかな時間

1月27日の朝8時、前日見つけたシモバシラの結晶を確認しに行った。気温はマイナス1度。溶けたり小さくなったりしているかもしれないとドキドキしていたが、昨日とまったく同じ結晶がそこにあった。次の日にはすぐ溶けて消えてしまうと思っていたので驚いた。翌日28日になると少し結晶が小さくなっていた。それを残念に思っていると、すぐ先にもう一つシモバシラを見つけた。このシモバシラは最初に見つけたものよりひとまわり小さかった。そのときの場所や気温などによつて形も違っているから面白い。

1月31日早朝、今まで観察していたシモバシラの結晶は溶けてなくなっていた。わたしが見つけてから5日間も結晶が残っていたこ

とに驚いた。気温が上がったらすぐ溶けてなくなってしまうような結晶が、長くその場にあり続けたのだ。溶けてしまえば二度と同じ形の結晶は見られない。寒い日が続くとき、シモバシラを見つけて観察することがちよつとした楽しみになりそう。

秋に白く可憐な花を咲かせるシモバシラは、冬にはふれたら壊れてしまいそうなのはかない結晶の花を咲かせる。図鑑でしか見たこととかなかったその不思議な現象を確かめることができた。じつさいに観察すると結晶には糸のような質感があり、天然であることを疑ってしまう。つぎは結晶ができるまでのようすも観察してみたい。

多くの植物が枯れてしまう、凍えるほど寒い季節にしか見られない氷の花。冬に自然を観察することは難しいと思っていたが、新しい発見と驚きの連続だった。来年はどんな形の結晶に出会えるのだろう。今から楽しみだ。

宇佐美温加(社会学科1年) 文・写真
南條新(初等教育学科4年) 写真

目の前に広がる、 もう見られない景色



葉脈に沿って霜がついている (2017年12月23日)

久しぶりに訪れたまち並みががらりと変わっていることがある。同じように身近な山道も、人の手が入ったり植物が生長したりすることで姿を変えていく。今見ている景色は次に見たときにはどうなっているだろう。

2017年12月23日の朝10時ごろ、楽山公園から元坂^{もとさか}までの山道を歩いた。かかった時間は1時間30分ほど。雲のない青一色の空が木々のすき間から見えている。冬は自然のなかを歩いていても目につく色が少ない。春や秋に比べて、見るものなんてあるのかなと少し不安だった。けれどじつさいに歩いてみると、足元にも頭上にも見るものがあつた。どこに視線を向けていればいいのか、戸惑った

くらいだ。

足元には真つ白な葉っぱがたくさん落ちていた。背の高い木々が作つた日陰には霜がまだ残っていたから、落ち葉が真つ白に見えたのだ。1枚手に取ってみると霜がびつりについている。葉っぱが砂糖でコーティングされていみたいだった。

頭上に視線を向けるとプロペラのような種ができている。下に落ちていたものを手のひらに乗せて、ぼいと放ってみた。くるくると竹とんぼのように回って落ちていく。羽のような形をした種はほかにもたくさんあつた。その一つを、木にできた直径15センチく



上：カエデの一種。軽くて風が吹くとどこまでも飛んでいきそうだが、下：木のあいだからマツが生えていた。ここまで種を飛ばしてきたのだろうか (どちらも2017年12月23日)

景色が変わる

らしいの洞^{うら}のなかで見つけた。種をつけていた木と、そこまでの距離は5メートルほど。風にのつてここまで飛んできたのだろう。遠くまで飛ばすための工夫がちゃんと活きている、思わず「すごい」と声をもらしていた。

楽山公園の周りをぐるりと回って坂道を上る。赤褐色の門の楽山配水場を右手に、さらに傾斜のきつくなる坂をぐんぐん上っていく。すると急に周りがひらけた。視界一面に土の色と空の色が広がった。白い棒がによきによきと生えている。その正体はシカの食害



山の斜面いっぱいに植えられたサクラの苗木。周りにはシカのものと思われる足跡があった(2017年12月23日)

防止用ネットに覆われたサクラの苗木だ。この苗木は「つる桜の名所づくり事業」として2014年から植えられているのだそう。

苗木の周りを歩いてみると、倒木や切り株がたくさんあった。年輪が30くらいある倒木や直径約50センチの切り株。サクラの苗木が植えられる前の景色を私は知らない。わずかに残る昔の姿から、もう見るこのできない光景を思い浮かべた。

山道を歩いてみるまで気づかなかったけれど、まちからもサクラの苗木が植えられている場所が見えた。数年経てばあの場所にサクラが咲いて、山に登らなくても見ることができ。そのサクラを見たとき、私は綺麗だと思うだろう。けれどじつさに山道を歩いてみて、冬でも目に写る自然がたくさんあることを知った。それがサクラのぶんだけ切り取られてしまったと思うと、少しだけ悲しくもなった。

2018年2月12日にもう一度サクラの苗木を見ようと同じ道を歩いた。するとサクラの苗木の高さが目に見えて変わっている。



食害防止用ネットよりも苗木のほうが大きくなっていった。地面が雪に覆われて、自然が伐採された範囲の広がりが立っていた(2018年2月12日)

160センチ以上まで伸びていて、私の身長をいつのまにか抜いていた。たった1か月半ほどでこんなに大きくなるのかと、自然が変わっていくスピードの速さにどきりとした。

いつか今日と同じ道をたどつても、目に写るものすべてが今日と同じままだとは限らないだろう。今ある景色はずっと残り続けるものではない。そのことにあらためて気がつく。

目の前に広がる景色をゆつくりと眺めてみた。目に見えるものが鮮やかに写り、それらをしっかりと目に焼きつけていたくなった。

杉浦茜(国文学科2年) 文・写真



自然科学棟の屋上から撮影した本学(2018年1月26日)

連載 第2回

木に学ぶ春夏秋冬

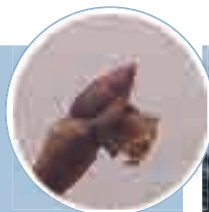
ほとんど毎日目にする、本学に根付く木たち。自らを語らない生きものの変化に目をやると何が見えてくるのだろうか。自然観察の初心者である私にとって、山に入らずとも、もっとも身近で触れあえるこの木たちと四つの季節を過ごしてみたい。

今号では冬のようなすを記録する。1月終わりと2月頭の2回、20～30センチほど雪が積もった。私たちが寒くて縮まっていたころ、木は葉を付ける準備をしていた。

平岡摩梨菜(社会学科2年)=文・写真

ケヤキ

場所 本学グラウンド
高さ 約3メートル



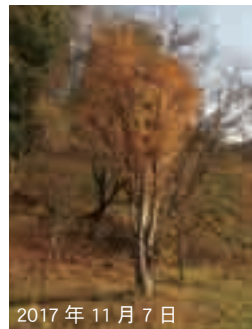
11月15日の時点では、葉をわずかに残した状態でほかに変わったところは見つけられなかった。10日後の11月25日に木を見上げると、青空に小さな点々を見つけた。目を凝らすと、それが冬芽だということに気が付く。大きさは1～2ミリ程度。2月6日の時点では4ミリほどになっていた。ケヤキはほかの木と比べて、かんたんには変化を教えてくれない。それほどゆっくりと成長していく。私にとってはそこがケヤキの魅力だ。



2018年2月2日

秋と比べると…

細い枝がたくさん伸びていた。秋は手に届く枝がほとんどなかったが、冬になった今では、少し頼りない枝に触ることができる



2017年11月7日

葉が落ちたことで、前号で紹介した実がなっているようすがよく見えた。実のほとんどは木を横に4分の1に分けたときの一番高い部分に集中していた



2017年11月17日



2018年2月2日

軸となる幹から伸びる枝の数が多いことに気付いた。また秋は葉に隠れていたが、枝の生える角度が鋭い。ほとんど幹と同じ方向に伸びているものもあった



2017年10月30日



2018年2月2日

枝がはっきり見えるようになったことで、枝が太いことを発見した。また枝の数もほかの3本の木と比べて少ない。ごちゃごちゃしておらずシンブルな形をしている



2017年10月26日



2018年2月2日

メタセコイア

場所 本学1号館前

高さ 約9メートル



葉を落とすのは4本のなかで一番遅かった。12月17日時点でも、全体で数枝だが葉は付いていた。葉が落ちて木の枝のようすが見え始めると冬芽が顔を出す。いつからか確実ににはわからないが、気が付くとポツポツと芽が出ていた。メタセコイアは冬芽が双葉のように対になってできる。大きさは2月6日の時点で5ミリほど。雪が降った後は枝が落ちていたり、枝先の一部、皮がはげてボロボロになっていたりした。

イチヨウ

場所 本学1号館前

高さ 約6.5メートル



この木は、冬芽ができたことにすぐ気付くことができた。冬芽が大きく、形もドングリのように目に入りやすかったからだ。私が冬芽を発見したのは11月10日前後で、1センチほどの大きさだった。それが2月6日には2センチ近くまで成長し、見た目もツクシのようになっている。また冬芽だけでなく、枝が新しく伸びていることも発見した。伸びた部分は色がほかと違って明るい茶色をしている。木はこうやって大きくなるのだと知った。

トチノキ

場所 本学正門横

高さ 約7メートル



11月7日にはすでに冬芽が見られた。それから1週間ほど経つと、目で見てわかるほどに大きくなっていった。トチノキの冬芽は焦げ茶色でおせちの黒豆のように光沢がある。2月6日に測ると2.5センチほどだった。手触りがツルツルしていそう。けれどじっさいに触ってみるとベタベタする。瞬間接着剤が手に付いたときのように糸を引く。枝の側面に対になってできているものも冬芽だそう。先端の冬芽のほうが成長が早い。どうしてだろう。

どんど焼きは14日の晩に

アルバイト先で知り合った佐藤まなぶさん（54）は1年間の行事のなかで「どんど焼き」がもっとも楽しみだという。どんど焼きに興味を持った私は佐藤さんの地元である都留市禾生地区（おちあい）の落合天神社を訪ねた。



おばあちゃんお手製の甘酒が鍋ごと届いたところ

どんど焼き

正月の松飾りや注連縄しめなわなどを各家から持ち寄り、一か所に積み上げて燃やす。小正月（こしょうがつ＝1月15日）前後におこなわれる。



辺り一面に火の粉が舞う

火を灯すまで

1月14日、夕方5時半ごろに落合天神社の鳥居をくぐると、育成会（※）の人たちが小さな灯りのもとに集まっていた。地域の人を迎える準備をしているところだった。背の高い机にはガスコンロが置かれている。お湯を沸かして、缶コーヒーやココア、お茶などを温めるのだ。

準備を進めながらもお酒やお菓子の手が伸びる。気づくと8人ほどの机を囲んでいた。まるで小さな宴会場のよう。地域のお母さんたちによる持ち寄りの料理が次々と集まり、温かい料理から湯気が立ち上っている。子どもたちは土管にくべたたき火の周りで、飛んだり跳ねたり楽しそうだ。境内の中央に置かれたどんど焼きの山は、2メートル程の高さがある。この地域に住む8人の小・中学生が各家を回り集めてきたものだ。その山のなかには、お正月飾りやダンボール、スギの葉、燃やせる

ものならなんだって詰まっている。

佐藤さんが子どもだったころは、リヤカーを押しながらそれぞれの家を回ったそう。お正月飾りをもらうことよりも、お菓子をもらうことのほうが楽しかった。燃やすものを集めに、年上の子と標高970メートルの九鬼山^{くきやま}まで行くこともあったという。どんど焼きの高さについて尋ねると「ブルーシートでは覆いきれないくらいだったね。今の倍くらいはあった」とおっしゃる。当時はどんど焼きの歌があったそうだ。子どもたちが愉快地歌を口ずさみながら神社に向かうすがたを想像すると、私まで楽しい気持ちになった。

時間は特に決まっていらない

今年は例年に比べて人の集まりがゆつくりだったようで、育成会の人たちは準備を進めながら「6時半に火をつけるか」と時間を決めていた。地域の人の多くは夕飯を食べてからどんど焼きを見に来るという。時計

が6時半を指した。育成会の男性陣4人ほどが「そろそろやるか」と、どんど焼きの山に近づく。土管のなかで起こしていた火を山に移す作業がはじまる。どんど焼きの山をつつくようにして四方八方から火をつけていくと、10分ほどで山全体が炎に包まれていった。

燃え移るようすを一目見ようと、育成会のお母さんやお父さん、子どもたちの話し声が小さくなった。パチパチと燃え移る音が聞こえると、再びあちこちで話し声が聞こえてくる。同じ火を囲んでいるというだけで、はじめて会った人ともゆつくりと話すことができることが不思議だった。

みんなで楽しめること

午後7時を過ぎると温度計はマインス1度を指していた。気づくと境内には15人ほどが集まっている。夕飯を食べ終えた地域の人々がだんだんと集まりはじめた。育成会の人た

ちは、来た人一人ひとりに声をかけながら、甘酒やお菓子を勧めている。「○○ちゃん大きくなったね」、「おばあちゃん来てくれたの」といった声かけから、近況を話し合う。

子どもたちは土管のたき火を囲んでマシユマロやポップコーンを焼いている。同じ土管の上に網を置いて、今朝採ってきたばかりだというワカサギを振る舞う男性もいた。寒いけれど、つい長居をしてしまう。そんな雰囲気心地よい。

午後7時30分。炎がだんだんと落ち着きはじめると、針金に通した団子を火の元に置いていく人が見えはじめた。団子は家ごとに作る。この団子を食べると1年間風邪をひかないという。他にも、書初めを燃やすと字が上手くなるという風習がある。佐藤さんが子どものころには子どもたちみんなで書初めを燃やした。燃やした灰がどれだけ上るかを競ったという。「みんな自分のが一番高く見えるだけだね」と笑って



火が「おき(弱い状態)」になったら、筒状にした団子をくべる。団子は上新粉を丸めたもので、焼きたては香ばしいが味はしない

おっしゃる。

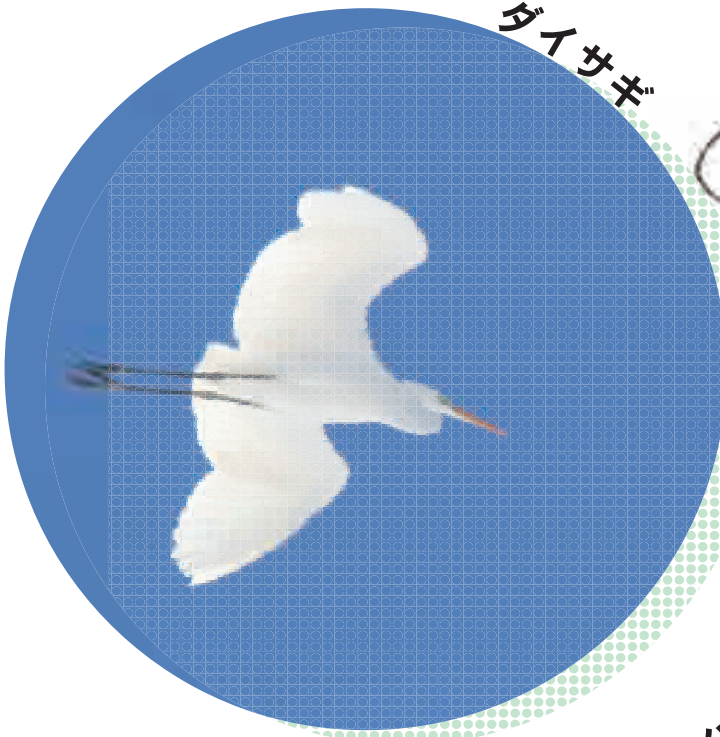
「遠慮するんじゃないよ」。はじめて参加する私に育成会の人たちは何度も声をかけてくれた。その度にお菓子や甘酒を手にとる。この地域で育ってきた人たちの輪のなかにいながら、まるでこたつのなかで足を伸ばしているような気分になった。この心地よさは、一度入ったらもう抜け出せない。

取材にさいしては、本文中でご紹介できなかったかたがたにも聞きとりさせていたいただきました。この場をかりてお礼を申し上げます。

江利そらむ(社会学科2年) 文・写真

フ イ ー ル ド 暦

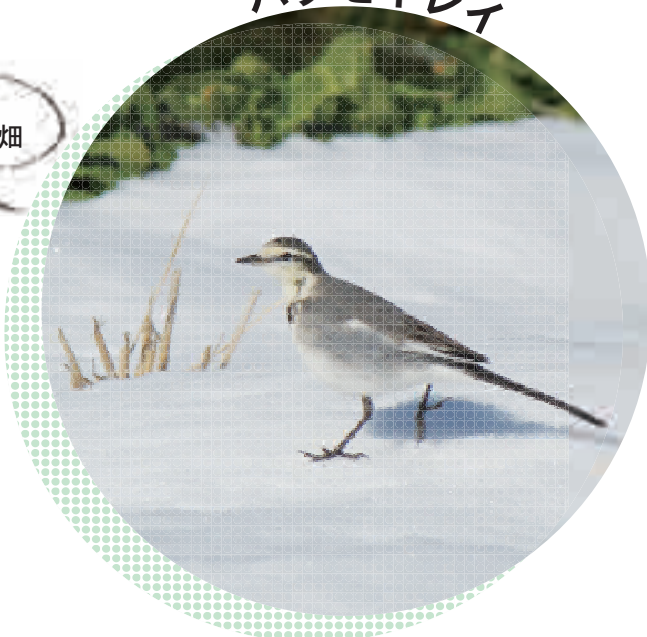
ダイサギ



2018年1月24日
十日市場の高速道路沿いの水辺

体長1メートルほどの大きな鳥で真っ白な羽根に黄色いくちばしが特徴です。都留市では川の近くを飛んでいる姿をよく見かけます。ダイサギよりも少し小さいチュウサギという鳥もいます。

ハクセキレイ



2018年1月24日
十日市場の水掛け菜の畑

喉のあたりが白いのが特徴の鳥です。似た鳥で喉のあたりが黒いセグロセキレイという鳥もいます。畑や、駐車場などひらけたところを歩いている姿をよく見かけます。

トックリバチのなかまの糞



生垣のなかに泥団子のようなものがくっついてる枝を見つけました。大きさは直径2センチほどで上の部分には穴があいていました。

2018年2月17日
上谷3丁目

寒くなるこの時期は、ほかの時期と比べて動植物を見かける機会が少なくなります。けれど鳴き声を頼りにじっと空を見上げてみたり、じっくりと目を凝らして木や葉っぱを見てみたりすると、たくさんの出会いがありました。

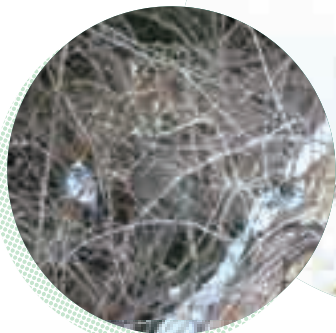
『フィールド・ノート』編集部 文・写真

2018年1月24日
十日市場の水掛け菜の畑

2018年1月24日
十日市場の高速道路沿いの水辺

ツグミ

アオサギ



2018年1月24日
やまびこ陸上競技場付近

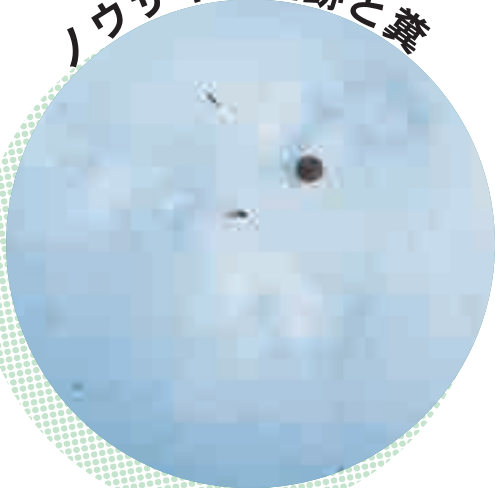
茶色い羽とお腹の斑点模様が特徴の冬鳥です。冬になると市内のあちこちで見ることができます。畑のなかを歩いていたり、道沿いの木などにとまっている姿をよく見かけます。

「ギャアア」と上空から鳴き声が聞こえたらこの鳥の場合が多いです。白い羽に灰色の羽の部分が目立つ鳥です。川沿いの木のでっぺんに止まっていることが多いです。立つと1メートルほどあり目立ちます。

2018年2月9日
本学うら山

ノウサギの足跡と糞

ガの幼虫の食痕



うら山のひらけた場所で見つけました。足跡のそばには糞も残っています。近年、ノウサギは都留市でも姿を見かけることが少なくなりました。

2018年2月13日
本学うら山

ササの葉を横切るように穴が空いています。キャンパス周辺の遊歩道でもよく見かけます。これはガの幼虫が食べた痕だとされていますが、ガの種類は特定できませんでした。



丸くふくらんだ梅のつぼみ

連載

こてんさんぽ

第3回 梅

難しく考えずに、気軽に古典を楽しんでほしい。例えば、お散歩しながら歌を口ずさむみたいに。きっと当時の人の気持ちが伝わるはず。
松、竹と並んでおめでたいものとされる梅。じつは、都留市とも関わりが深い植物でした。今回はそんな梅をテーマに和歌を紹介します。

中里真琴（大学院文学研究科1年）＝文・写真

雪解けのころになると、春を待ちわびて木々のつぼみがふくらんでくる。そのなかでも一番の早起きは梅の花だ。まだ周りに花の姿が見えない時期でも、梅の花は一足早く開花する。手を伸ばせば届く高さの木だから、目につきやすい。

梅が枝に 鳴きてうつろふ 鶯の
うぐいす

羽白たへに 淡雪ぞ降る
はねしろ

「鳴きながら梅の枝を移動するウグイスの羽を白くして、淡雪が降っている」というこの和歌は、『万葉集』にある作者不明のもの。「梅に鶯」ということわざがあるが、梅とウグイスは千二百年も前からともに愛されてきたことがわかる。じつはこの二つ、都留市にとっても関わりが深いものだった。

古渡の梅林へ

都留市は梅の栽培が盛んで、市の花にも梅が指定されている。それにふさわしく、市の鳥はウグイスだ。都留市古渡地区に梅林があるという話を聞いて、2月13日にじつさいに梅林を訪れてみた。富士急行線東桂駅に着いて歩くこと40分。鹿留川を渡る橋を探し

て迷いながら、なんとか目的地にたどり着いた。立ち並ぶ民家を抜けると、とつぜん梅林が広がった。まだ花は咲いていなかったが、大きく膨らんだつぼみをたくさんつけている。そばに住んでいる女性が「咲くととてもきれいですよ」と声をかけてくれた。きつと梅のいい香りもしてくるだろう。帰り道、梅林からまっすぐ駅のほうに向かうと、15分ほどで「不二家」の横に出ることがわかった。気軽にに行ける場所なので、見ごろになったらまた訪れたい。



古渡の梅林。花が咲いたらきっと見応えがあるだろう

梅ってこんな花

ところでみなさんは梅、桃、桜の違いを知っているだろうか。春先になると白色の花やピンク色の花をつけた木を見かけることがあるが、私はずっと見分けることができなかった。それぞれの違いを調べてみると、花びらだけでなく、幹のようすや花のつきかたにも違いがあることがわかった。花を見て「きれいな」という感想だけではなく、「こんな色の梅もあるんだな」「この時期に桃が咲くなんて、早いなあ」という感想が持てたら、なんだか植物博士みたいで素敵だ。

梅の和歌

古典の世界で「花」といえば、基本的には桜を指す。しかし花の匂いについて話題にしているときは、梅を指すことになる。梅を詠んだ和歌はとても多いのだが、そのなかでもちよつとおもしろい和歌を紹介しよう。かつこ内は空欄にしてある。

雪降れば木ごとに花ぞ咲きにける
いづれを（ ）とわきて折らまし

梅の花びらは5枚で、丸い形をしている。開花時期は2～3月



つぼみはまんまる。
まだ咲かないうちから梅だとわかる

ごつごつとしてたくましい梅の木。
5メートルほどの高さで、登りやすい
そんな曲がりくねった枝をしている



桜の花びらは先が割れている。
開花時期は4月



桃の花は先がとがった形。
開花時期は4月。梅、桜と異なり、花が咲いているうちに葉が出てくる

これは紀友則の歌だが、意味はこうだ。「雪が降り積もって、どの木にも花が咲いたように見えるなあ。さて、どれを（ ）と判断して手折ろうか」。さあ、かつこに入る言葉はなんだろう。今回のテーマから簡単にわかってしまうが、理由も一緒に考えてほしい。学問の神様として有名な菅原道真は、梅をこよなく愛していたという。そんな彼が九州に左遷されるときに詠んだ和歌がある。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花
主なしとて春を忘るな

「梅の花よ、春風が吹いて来たら、その匂いを風に乗せて届けておくれ。私がいなくても春になるのを忘れずに」。

道真の和歌から、梅と故郷に対する深い愛情を感じる。

3月になって、また卒業生が都留市を去っていく季節が来た。道真の和歌とは少し状況は異なるが、同じ気持ちになつてくる。春になったら、新生活の地から便りを送ってほしい。私たちのことを忘れないで。

「雪降れば」の和歌の空欄に入るのは「梅」。「木ごと」を漢字にすると「木毎」。つまり「梅」という漢字になるところがおもしろい。千年以上も前から漢字パズルはあったのだ

後編

金山 神楽

はっぴ
法被を着た男性陣が神輿を担いで神社の階段を上る。右に左に傾く神輿を見て、こちらがハラハラした

今号では神楽に参加する人のようすをお伝えします。

2017年8月6日に上谷地域でお祭りが行われた。金山神社に神楽を奉納するためのお祭りだ。神楽を見物していると、女の子に「太鼓を叩いてみませんか」と誘われた。

お祭りの日に出会った女の子は、小学生くらいの子だった。突然やってきて神楽を見物している私に、真っ先に話しかけてくれた。とりとめのない会話をしていると「太鼓を叩いてみませんか」と提案される。年に一度の神楽の演奏に、何も知らない私が手を出すのは気が引けた。「緊張しちゃうから」と断ると女の子は「やってみればいいのに」と残念そうに呟いた。女の子は断られても何度も話しかけてくれる。「太鼓を叩いてみたら」「笛を吹くのは?」。なぜそんなに熱心に誘ってくれるのだろうと不思議に思った。

すごいって思ってもらいたい

後日、10月28日にお祭りで出会った女の子に再会できた。女の子の名前は



私の友人が太鼓の叩きかたを教わっている場面。太鼓を叩いているのが心詠ちゃん、右側にいるのが前号でお世話になった高尾芳久さん。太鼓のリズムを教えている。心詠ちゃんは「ドン テケ テケ」とリズムを表現する音を口ずさんでいる

小林心詠ちゃん(12)。この日はお祖父さんの家に遊びにきていた。そこで私はお話をさせてもらった。

上谷のお祭りには屋台がない。心詠ちゃんは屋台につられて人がくるのではなく、神楽を目当てにきてほしいと話す。

「自分が出るから」、「すごいって思ってもらいたいから」。(演奏に)がっかりしたら来年きてくれなくなっちゃうし」と続けた。太鼓は打楽器だけれど、神楽では主旋律と同じ扱いになる。太鼓を叩く心詠ちゃんが失敗すれば舞も笛もずれてしまう。「神様に見せるものだけど、そういうことはあんまり意識してない」。少し険しい表情から、プレッシャーに打ち勝とうとする鋭い熱意が見える。

神楽は楽しい

神楽の演奏に誘ってくれたときの心境を尋ねると「楽しいからやってもらいたい(と思った)」と答えてくれた。この日も「笛もまだあるよ」と笛を使って演奏しようとしてくれる。太鼓は手元になから難しいと言いながら、「牛の皮

があれば」と続けた。太鼓の叩く面は動物の皮でできている。材料があれば太鼓を用意して挑戦できるのという意味だったようだ。

記事を読んでもくれる人に何か伝えたいことはありますかと聞くと「来年もあるものでぜひ体験してください!」と満面の笑みで「元氣よく訴える。「体験するのは楽しいですよ」と続けた。心詠ちゃんは何度も「楽しい」と言葉にする。「絶対楽しいよ」と元氣いっぱい飛び跳ねながら太鼓を勧めるようすを思い出すと、やつておけばよかったと後悔した。

心詠ちゃんは真剣な表情になつて話を続ける。「適当な神楽じゃなくて、ほんとにすごいどんどんな神楽にしていきたい」。そして次の世代の人たちにも神楽を楽しんでもらいたいと続ける。私を太鼓に誘ってくれたのも、楽しいことを分けようとしてくれたからかもしれない。保存会のかたがたや近所の人たちも縁起のいいものを分けあおうとしてくれた。神楽は見るのもつくるのも楽しい。そしてそれを分けあうのが金山の神楽での大きな楽しみだった。

高橋未瑠来(社会学科4年) 文・写真



お祭りが終わった。22 時ごろ



氏子総代(※)のお宅で笛を吹く。17 時ごろ



神輿を担いで神社の階段を上る。21 時ごろ



神輿を担ぐ準備。20 時ごろ



屋内で激しく舞う。19 時ごろ

※惣代：神社の氏子の代表。氏子は広く言うと、神社にある地域に住む人々。総代とも書く
(写真はすべて 2017 年 8 月 6 日に撮影しました)

都留の風景写真集

—余寒の候—

今号の担当：平岡摩梨菜（社会学科2年）



始業前に雪かきをして通り道を作ってくれる職員のかた

散歩中に見かけた、雪景色のなかを走る電車

早朝、すれ違う人はだれもない。街灯だけが光る三町商店街



前編 おばあさんの 思い出 ～学生時代～



やむらまち
谷村町駅前にある「^{はらしちこうどう}原七弘堂文具店」のおばあさん(85)が
昔の思い出を教えてくださいました。学生のころの思い出。家族
との思い出。前編では、学生時代のお話について書く。おば
あさんが小学生のころ、ちょうど第二次世界大戦が始まった。

当たり前ではないこと

おばあさんは昭和7年、今の文具
店がある家で生まれた。当時の谷村
町駅前には舗装されておらず、砂ぼこ
りが舞うような道だった。

昭和13年から6年間小学校にか
よったあと、受験をして昭和19年か
ら女学校へかよった。小学生のとき、
日本は第二次世界大戦で南方へ攻め
いる。おばあさんは小学生のころの
話でも、昨日のことのように細かく
覚えていた。

昭和17年つちゅう年はねシンガポー
ルなんかが陥落して。小学5年生く
らいごろかしら。切り出した材木を、
今の都留文科科大学があるところから
谷村の小学校までずうつと歩いて運
んで。何に使うんだか、軍事的なこ
とだったと思うんですけど。よく
働いたよね。勉強どころじゃない。
働いたらね、ご褒美って、ビスケッ

トを3枚！結構大きめのやつでね。
うちに持って帰って、1枚は妹にあ
げたりして。

何かのお祝いで学童にゴムまりを
配ってくれたのよ。でもね、私のク
ラスは56人くらいだったんだけど、
50個くらいいしなくて。ジャンケン
なんかして、もらえなかった6人が
大泣きして、私のあげるよなんて子
が出てきたり。テニスボールくらい
のゴムまりでもどれだけ貴重だった
か。それからゴムまりが流行って！
休み時間なんてみんな昇降口に出
て、みんなでつくのよ。みんなでつ
くもんだから、うまくつけない。痛
んじやいけないからって、みんな
ボールのまわりに布巻いて。弾ま
なくなっちゃうのね。そういう時
代よ。南方のほうに日本軍が進軍し
ていくころだから、バナナの、干し
バナナみたいなのがたくさん売って
た。お砂糖とか、小麦粉だともな
くて、みんなおやつに干しバナナ。
なかなか美味しかった。



「写真ってというのは、昔は写真屋さんに頼んで撮るんです。だから記念写真とかしかないよ。写真屋さん来るからって、学校の休み時間に抜けて撮りました」



昭和5年に建てたときからある玄関。改築のとき、まだ使えるからと玄関だけ残したという(2018年1月26日)



お父さんは大学卒業後、兵役のため一年間訓練をし、将校(※1)になった。上層のかたとかわした文書を残していた(2018年1月14日)



お父さんとお母さんのアルバム。家にあるアルバムのなかで一番古いといっ
て持ってきてくれた(2018年1月14日)

おばあさんは楽しかった、嬉しかった、辛かったと思うことをたくさん話してくれた。はじめは想像で
きない状況ばかりで、物語のように思っていた。でも小学生時代ならではのストレートな気持ちにつられて、一緒に生活していたような気持ちになっ
てくる。おばあさんがビスケットをもらえたときの話では私も万歳をしたくなった。
今なら、ビスケットは3枚よりも多くお店に並んでいるし、ボールは家になくても幼稚園や学校にある。
当時はビスケットをもらえることも当たり前ではなかったのだ。今では些細な出来事かもしれないが、こんなに細かいことまで覚えてい
るものがある。

不自由だからこそ

当時は小学校まで義務教育で、女学校にかよったためには受験をするこ
とになる。女学校は、現在の都留市

役所がある場所にあり、女学校の校舎はのちに都留文科大学の前身である臨時教員養成所の校舎として使われた。

女学校にかよったことになったのは、昭和19年。日本の戦況が悪くなると、生活にもその影響が出ていた。

当時は女学校ってのは勉強ができて、お金も余裕がないといけなくて。昔の女学校は何の勉強をすると思います？ 昔の女学校はね良妻賢母って。女学校に入る目的っていうのを親が書くんだけど、良妻賢母って書いて出すんですよ。

女学校のころは、戦況が悪くなつて制服なんてなかったよ。みんなもんぺ履いて、しょうがないからお母さんの着物を縫って。6月の中間テストがあるでしょ。それが終わったら勤労奉仕だって農家に駆り出されてね。最初のうちは楽しく行くんだけどね。春はまだいいのよ。秋の手伝いはね、田んぼに薄氷が張って



昭和 15 年の体力測定をする谷村高等女学生。ジャージではなく、もんぺを履いている。おばあさんが入学した昭和 19 年は太平洋戦争中で写真を見つめることはできなかった

るの。雇い入れるほうも（戦争で）傷を負っているから。もう女・子どもしかないから、いっちゃまえに使われちゃって、大変だった。何をやったんだかは覚えてないんだけど、ひどく悲しかったことは覚えてるよねえ。2 週間ぐらいは行ったかしら。

2 年生になると学校工場に動員されるの。私たちはね学校に工場が設置されて。凸版工場っていうの。印刷機が学校の講堂に設けられてね。当時、軍隊手帳（※2）つてのがあって、それを作ってた。糊は割烹室（※3）で煮て、作るんです。1 年生だけは授業をやって。だから 1 年生の

使う教室以外は全部取っ払って工場になっちゃってたね。私たちは「かみおり」っていう、紙を裁断して折ってつちゅう仕事をしたんだけど、班長さんから今日は何部刷りますって報告されて、みんなで競争すんですよ。終わったときに、誰それさんはいくつ、っていつて。子どもだからね、気楽におしゃべりしてたわよ。今日はチョコレートもらえたねえとか、あのチューインガム美味しかったねえ、明治のクリームキャラメル美味しかったか。食べ物の話ばかりして。

うちの父もそのころは 40 いくつだったんだけど、赤紙が来て。で出征したんだけど、もう終戦の年の 6 月のことだったから。若者はもういなくて、老兵はばかりよ。こんな老兵ばかりじゃ、この戦争は負けますよ、だなんていつてた。そしたら学校の先生にも赤紙が来て。一緒に電車に乗って行ったよ。父は神奈川県ほの保土ヶ谷どがやに派遣されたんだけど、国は

もう何も用意できなくて、食料集めからしなくちゃいけなかったって。みんなで農家をお願いして、竹を切らせてもらって箸なんか作って。それでやることは防空壕を掘ること。空襲に備えて、毎日毎日掘ったんですってよ。そしたら終戦になって。そのあとが大変だったわよね。みんな闇市なんてので食料集めてた。

「勉強どころじゃなかったよねえ」と当時を思い出して、かみしめるようにいう。私は戦時中のお話を聞いているあいだ、簡単に相槌を打てないでいた。おばあさんがゆつくりと話したあとで沈黙の時間がうまれる。そのあいだも、おばあさんは目を細めて戦時中の風景を思い出しているようだった。

お菓子の話になったとき、「同窓会で集まるとあのお菓子美味しかった、とか話してねえ」と声を出して笑うおばあさん。勉強どころではなくなってしまった学生のころの話

で、笑い始めたのは意外だった。私には楽しい思い出が、戦時中の自由な生活のなかでぎらぎらとした存在に思えた。

おばあさんの思い出

戦争が隣合っている生活を私は知らない。だからはじめおばあさんのお話はまるで物語のような感覚だった。でも顔をしかめたり、笑顔になったりしながら話すおばあさんの姿に、これは現実の話だと実感して、私は緊張した。

おばあさんは、記憶の断片を少しずつ私に教えてくれた。おばあさんの印象に残っている風景、会話、生活。所々の記憶でもおばあさんの印象に残っているぶんだけ、私の頭のなかで再現される。時代を越えて、当時のようすが私に伝わってくるのだ。次号も、おばあさんの語る昔の記憶に耳を傾けたい。

佐藤成美（社会学科 1 年） 〓 絵・文・写真

FIELD NOTE NEWS

2017年12月から2018年2月の『フィールド・ノート』編集部での活動をお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

ウスタビガのまゆ@蟻山 (2018年2月11日撮影)

＼ できるよ ♪ ／

『FIELD・NOTE』 ブックレット

記録の蓄積や日ごろの冊子では伝えきれない活動を、新しい形で残していきたいという思いから、『フィールド・ノート』編集部では「ブックレット」を発行しています。この冊子では毎号一つのテーマを掘り下げていて、第3弾となる今回は「織物」を取り上げます。かつて都留市では織物産業が盛んで、まちなかには機織りの音が夜遅くまで鳴り響いていたと言います。『フィールド・ノート』創刊以来15年間、多くの編集部員が養蚕や織物の記憶を聞き取りしてきました。それらを集め再編集することで地域の姿を見つめなおします。3月下旬に発行の予定です。ぜひご覧ください。(伊藤瑠依)



＼ 帰ってきたよ ／

ムササビ観察日記

巣箱を利用していたムササビが10月に巣立ちました(本誌95号参照)。そのうちの一头がそれからしばらく巣箱を利用しています。1月22日の夜、雪が降るなか外に出て以来巣箱に戻っていませんでしたが、2月10日の朝、巣箱で寝ているようすが見られました。また21日にも戻ってきています。たびたび巣箱を利用しているようです。春の子育ての時期にまた利用されるのが楽しみです。(小俣溪和)



FIELD NOTE

no. 96 Mar.

発行人

北垣憲仁 (48)

統括編集者

西教生

編集長

長尾泉 (6-8)

南條新 (16-18)

副編集長

山内利奈 (1,9-11,15)

平岡摩梨菜 (30-31,41)

編集

塚原瑞穂 (22-23)

中里真琴 (36-37)

今村遥香 (45)

小俣溪和 (34-35)

高橋未瑠来 (38-40)

窪田りさ (19-21)

江利そらむ (2-3,32-33)

佐藤琢磨 (14)

杉浦茜 (28-29,34-35)

高橋光 (4-5,12-13,48)

宇佐美温加 (26-27)

佐藤成美 (42-44,46-47)

関唯伽 (24-25)

寄稿

伊藤瑠依 (45)

編集補助

小泉篤広

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

編集後記

思い出される

あんなことや

こんなこと



は っと気がついたときには手に激痛が走っていました。中屋敷でア
シナガバチの巣の写真を撮っていたときのことで。良い写真を
撮ろうと巣に近づきすぎて刺されたようです。手の腫れがなかなかおさ
まらずペンを持つのも大変でした。あれ以来、不用意に蜂の巣には近づ
いていません。 (小俣溪和)

ふ ちハプニングなら、4年生といると日常茶飯事。そのなかでも一
番覚えているのは、2年生のときに5人で築地市場に遊びに行っ
たときのことだ。みんな自由人なのでそれぞれが興味のあるところに行っ
て、人混みのなかではぐれた。でも小俣君の鮮やかな青いコートを目印
に自然と5人が合流できた。自由だけど統率のとれた(?) そんな4年生。
(今村遥香)

に ものにお菓子、ときには大きな白菜や大根のこともありまし
た。なんのことかって? 取材のあとにいただいたおみやげの話
です。お話を聞くために、はじめて地域のかたのお家に上がったときの
こと。緊張しながらメモを取っていると、出されたのは白菜の漬物でし
た。これがおいしくて……! つまんでいたら自然と肩の力が抜けました。食べ
物を前にすると話しやすい。これは4年間取材をしてきて感じたことです。
(長尾泉)

ん ? これはなんだと近づいてみると、それは氷柱^{つらら}でした。1年生の
冬に夏狩の太郎次郎滝へ行ったときのことで。滝への道中、崖
から染み出た湧水が凍り、巨大な氷柱になっていたのです。それまで氷
柱を見たことがなかったためか、僕はかなりはしゃぎました。そのとき
のことを今でも友人にからかわれます。 (南條新)

ぐ ぐぐと唸りました。私が「モンシロチョウだ」と叫んだら、南條
さんと長尾さんに「違うなあ、紋がない」と言われたからです。
うら山を散策していたら、小俣さんが数十メートル向こうを指差して「○
○の鳴き声が聞こえる」と言ったのを覚えています。1年生のときは知
らないことだらけで不安でした。今では道端に生える植物の名前を覚え、
足元に生きる昆虫の暮らしぶりに興味津々。日々の楽しみに「自然観察」
が増えたこと、そのきっかけを作った編集部の皆さんに出会ったことが
大きなハプニングです。 (高橋未瑠来)

FIELD・NOTE no. 96

発行日: 2018年3月16日

発行部数: 700部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交
流研究センターにありますのでお気軽
にいらしてください。



次回予告

はじまる

2018年6月発行予定



アズマモグラを観察するには



①アズマモグラのトンネル。トンネルの直径は4～5センチメートル ②アズマモグラの観察装置。雨の日も観察できるように板で雨よけを作った



やっと出会えたアズマモグラ。ヒミズと同じような素早さが印象に残った

前号 95 号では本学のキャンパスにできたモグラ塚を紹介しました。このモグラ塚を作ったのはアズマモグラです。アズマモグラはおもに日本の中部以北に生息していて寿命は3年ほどです。私たちの足もとで暮らしているにもかかわらず、その生態はほとんどわかっていません。それは一生を地中で暮らすため観察が難しいというのが一因でしょう。

このアズマモグラは倒木などの固いものの下によくトンネルを掘ります。そこで、固いガラス板を倒木にみたてて地面に置き、その上に板を重ねます。昼間でもなるべく地中と同じように暗くしておくためです。しばらくするとガラス板の下にトンネルができます。そうしたら重ねた板を取って観察してみましょう。じっと観察してみると野生のアズマモグラに出会えます。この方法は、93 号で紹介したヒミズの観察の方法と同じです。動物の暮らしに寄り添った観察をするために、工夫して出会いをじっと待つのも、フィールド・ミュージアムの楽しみのひとつです。

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。